

不登校の子どもと家族に対する宿泊型プログラムに関する研究

——ボランティア支援スタッフの調査から——

The Studies on the Volunteers who Take Part in the Accommodation Programs for Non-attendance at School Children and His Family

難　　波　　愛・越　智　千　尋	Ai Namba　　Chihiro Ochi
	(岡山済生会総合病院)
進　　賀　　友　一・東　郷　和　美	Tomokazu Shinga　　Kazumi Togo
	(玉野市教育委員会)　　(岡山赤十字病院)
山　　下　　弥　生	Yayoi Yamashita
	((財) 河田病院)

1 はじめに

A県では平成13年度に不登校支援のため、国から委託事業を受けたのを始まりとして、平成14年度からは県単独事業として、不登校の子どもと保護者に対する、1泊～2泊の宿泊型の自然体験プログラムを提供してきた。本事業はA県教育委員会の主催事業であり、県内の複数の施設を利用してプログラムを開催するものである。窓口は県が担当するがプログラムの作成は各施設に任せられている。年間10回程度開催されるプログラムの全体を県がとりまとめて広報等を行ったり、記録を管理したりしている。

このようなスタイルで開催してきた本プログラムも平成22年度で10年目を迎えた。この間、対象児の抱える心理的な課題は、神経症的なものから発達障害的なものへと変化した。個々のニーズの変化に伴って、子どもを支える側の支援技術もより高度なものが求められるようになった。参加者を支える者は、施設職員や臨床心理士等からなる指導スタッフと子どもと一緒に行動しサポートする支援スタッフからなる。支援スタッフはボランティアによってまかなわれており、ほぼ全員が大学生年代である。ボランティア活動への参加が個人の心理的成長を促すという先行研究があるが（水野・加藤、2007・黒沢ら、2008）本事業においても学生がボランティア活動に参加することによっ

て、人間的に成長したり、自分自身の進路について大きな影響を受けた者も少なくない。一方で、支援スタッフは参加する子どもに対して一対一の担当制を採用していることにより、子どもと過ごす時間が長くなり、支援スタッフと子どもとの相性や子どもの特性によっては、対応が難しい局面も出現してきた。起床時間から就寝時間までほぼ休み無く子どもに対応することから生じる、心身の疲れも相当であろうことも認識されている。

これまでにも主催者は支援スタッフの教育的、心理的サポートを行ってきた（事前研修の実施、各旅におけるスタッフミーティング等）が、支援スタッフがどのようなストレスを感じているのか、そのことによってどの程度の心身へのストレス反応が現れているのか、また逆に支援スタッフを体験したことによって、どのような自己の成長感や達成感を感じているのかについて調査を行い、上述の課題を明らかにすることを本研究の目的とする。

2 方法

（1）調査対象

2010年度における、県立のX施設、Y施設の各青少年施設で実施された4回のプログラムに参加した支援スタッフ全員。のべ62名。男性20名、女性39名、不明3名。

（2）調査方法

2010年5月のプログラムに参加した支援スタッフに対して、自由記述法によりストレッサー尺度を作成するための予備調査を行った。質問Aのストレッサー尺度は、予備調査から作成した項目に加えて岩佐・山本（2008）の開発した「ボランティアストレッサー尺度」の項目を本事業に沿った文言に変更して質問紙を作成した。質問Bのストレス反応尺度は「ボランティアストレス反応尺度」（岩佐・山本、2008）から選択して作成した。質問Cの成果尺度は、予備調査で得られた項目と水野・加藤（2007）で使用された「ボランティアで得されることについて」尺度から23項目を作成した。2010年9月以降の4回のプログラムにおいて、プログラム終了時に支援スタッフ全員に配布、その場で回収した。

（3）調査内容

質問Aは25項目のストレス項目から成る。「1 子どもとうまく関われなかったこと」「2 何をしてよいかわからなかったこと」等。各項目ごとに体験の「あり」「なし」を回答した後、「あり」の場合のみストレスの度合いを4件法で回答する。

質問Bは15項目のストレス反応項目から成る。「1 落ち込んだ」「2 困ってしまって考えた」等を4件法で回答する。

質問Cは支援スタッフの体験を通して得られると思われる成果、23項目から成る。「1 子どもが好きになった」「2 不登校の子どもとの関わりを学ぶことができた」等を4件法で回答する。自由記述では、「3日間の旅を終えての率直な気持ち」「活動全般についての感想」「要望」を自由に書いてもらう。

3 結果と考察

(1) 対象者の属性

表1～表4は、4回の調査における回収人数（回収数であり、実際の参加人数とは異なる）、参加回数、立場、男女の人数を示している。いずれもべ人数である。

経験数は、初めて（27人、47%）が最も多く、3回以上（24人、41%）が続く形となった。経験者と新人がほぼ拮抗する形であったことが分かった。また今年度は社会人としての参加は1名のみであった。男女別にみると、女性が39名（66%）が多い。この傾向は例年と同様である。

表1 参加人数（のべ）

旅	人数(%)
1 X施設（9月）	22 (36)
2 Y施設（10月）	13 (21)
3 X施設（12月）	12 (19)
4 Y施設（2月）	15 (24)
合計	62

表2 経験回数

回数	人数(%)
初めて	27 (47)
2回目	7 (12)
3回以上	24 (41)
合計	58
	不明 4

表3 立場（のべ）

立場	人数(%)
学生	20 (34)
社会人	39 (66)
合計	59

表4 男女別人数（のべ）

性別	人数 (%)
男	20 (34)
女	39 (66)
合計	59

(2) ストレスの有無とその程度（質問A）について

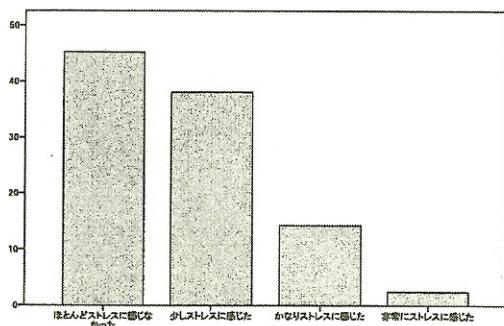
表5は、ストレス項目に関して「経験あり」の度数とパーセンテージを表したものである。「経験あり」の度数が多かった順に上位13項目（30%台まで）を列挙した。これによると、「何をしてよいのか分からなかった」「子どもとうまく関われなかっ」「担当の子どもがいろいろな子どもと交流できなかっ」という支援スタッフとしての動きや子どもとの関わりといった、活動そのものへの戸惑いが高いといえる。支援スタッフの大部分が、子どもとの関わりに起因する出来事を体験していたといえる。一方、「支援スタッフ同士で気を遣った」「支援スタッフの子どもへの関わりが不適切であった」「支援スタッフ間で気持ちに温度差があった」といった、支援スタッフのチームワーク不足に関する事柄も、体験されていることが明らかとなった。

表5 ストレスの有無（上位13項目）

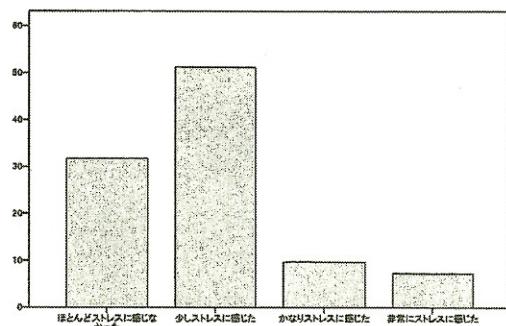
質問項目	経験ありの度数	%
2 何をして良いか分からなかった	42	68
1 子どもとうまく関われなかっ	41	66
19 担当の子どもがいろいろな子どもと交流できなかっ	34	55
8 支援スタッフ同士で気を遣った	30	48
6 子どもが話を聞いていない	27	44
7 子どもと意見が違った	26	42
12 子どもに反発された	24	39
10 支援スタッフの子どもへの関わり方が不適切であった	24	39
11 子どもから攻撃的な態度を受けた	22	36
5 子どもから無理な要求をされた	22	36
15 子どもに無視された	21	34
16 子どもがプログラムに参加しなかった	21	34
20 支援スタッフ間で気持ちに温度差があつた	19	31

図1群は、上述したストレス項目に関するストレスの程度（4件法）をパーセンテージで表したものである（「体験あり」の人数を母数として算出）。「子どもとうまく関われなかった」「支援スタッフの子どもへの関わり方が不適切であった」以外は、すべて「ほとんどストレスに感じなかった」を選択した割合がもっとも高く、ネガティブな出来事としては高い頻度で認知されていても、それが即ストレスとなるわけではないことが読み取れる。

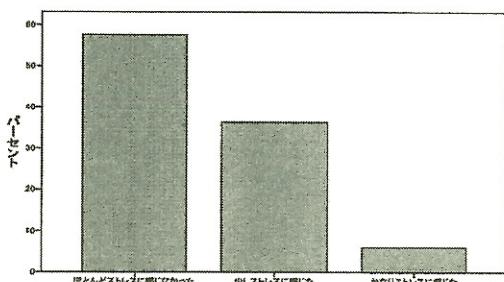
【第1群】



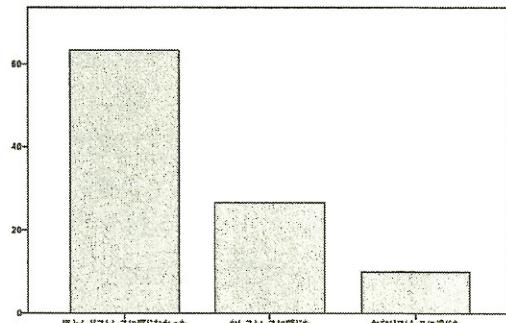
A2：何をして良いか分からなかつた



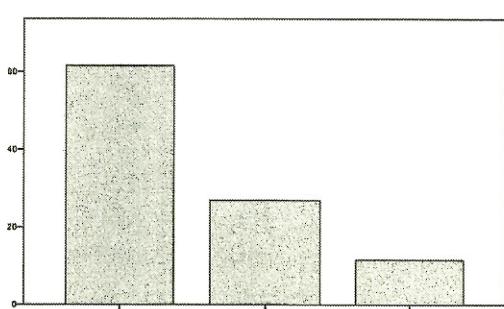
A1：子どもとうまく関われなかつた



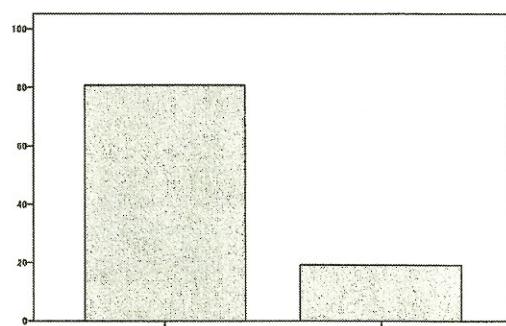
A19：担当の子どもがいろいろな子どもと交流できなかつた



A8：支援スタッフ同士で気を遣つた



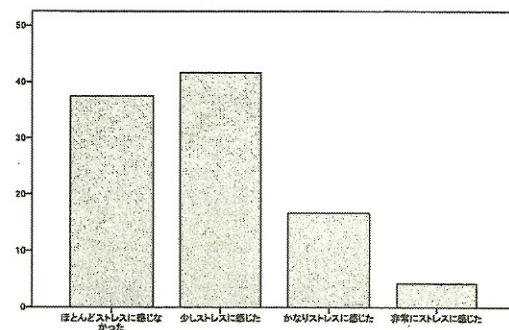
A6：子どもが話を聴いていない



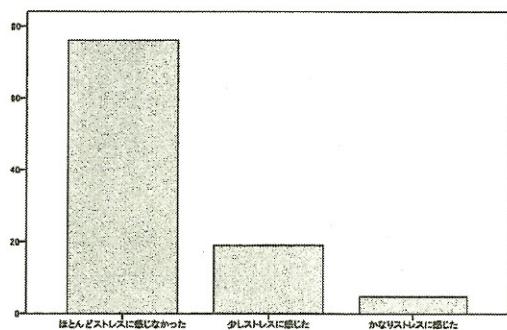
A7：子どもと意見が違つた



A12：子どもに反発された



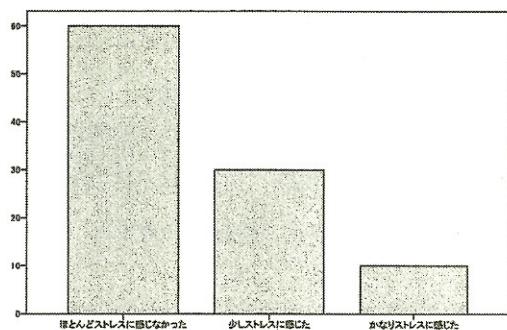
A10：支援スタッフの子どもへの関わりが不適切であった



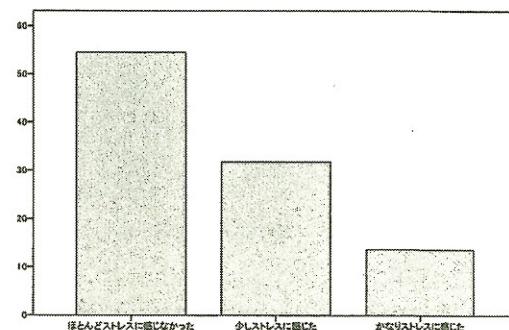
A11：子どもから攻撃的な態度を受けた



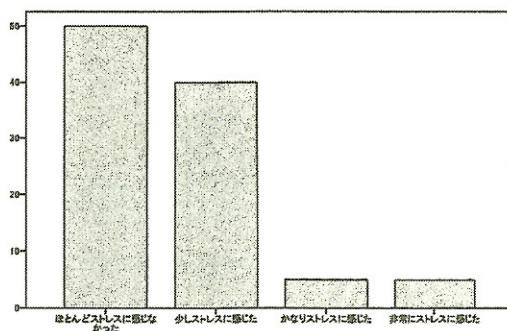
A5：子どもから無理な要求をされた



A15：子どもに無視された



A16：子どもがプログラムに参加しなかった



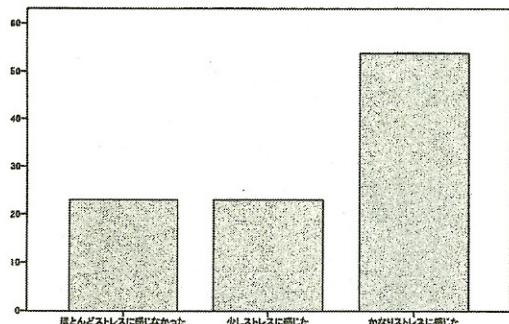
A20：支援スタッフ間で温度差があった

逆に、ストレスの程度が高い項目に着目してみると、表6のようになる。この表によると、「スタッフミーティングで問題点を話し合えなかった」と認識している人は、それに対するストレス度が高いことが分かる。同様に、「苦手なタイプの子どもと接した」、つまり担当の子どもに対して苦手感を感じた人は、ストレス度が高いことが分かる。これらの項目はネガティブな出来事として認知される頻度はそれほど高くはないが、問題と感じる人にとっては大きなストレスであることが示唆された。

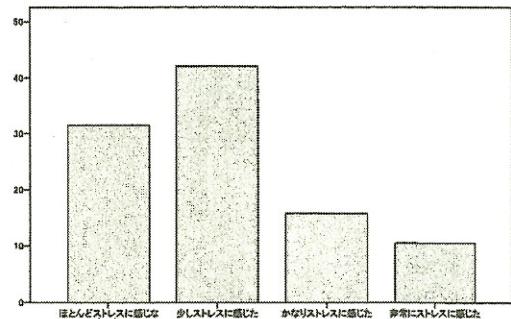
表6 ストレスの感じ方（上位6項目）

質問項目	「はい」の度数	平均値
9 スタッフミーティングで問題点を話し合えなかった	13	2.31
3 苦手なタイプの子どもと接した	19	2.05
23 どの程度プログラムの枠に沿った方がいいのか分からなかった	16	2.06
10 支援スタッフの子どもへの関わりが不適切であった	24	1.87
25 自由時間の過ごし方が分からなかった	13	1.77
2 何をしてよいか分からなかった	42	1.74

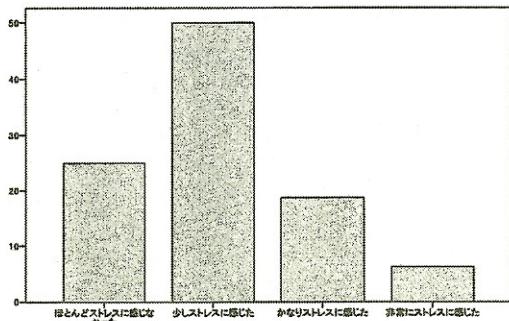
【図2群】



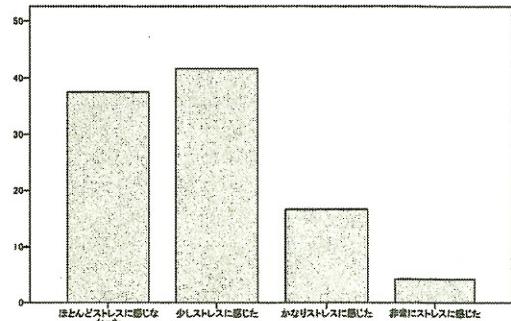
A9：スタッフミーティングで問題点を話し合えなかつた



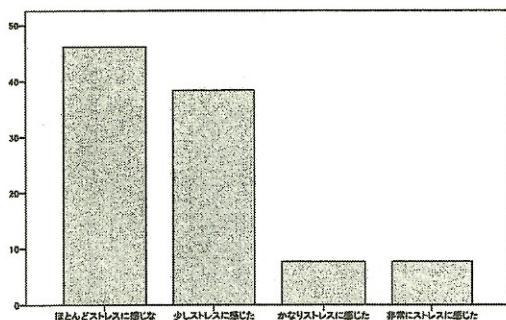
A3：苦手なタイプの子どもと接した



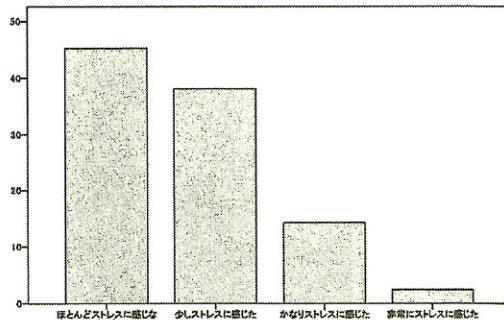
A23：どの程度プログラムの枠に沿った方がいいのか分からなかつた



A10：支援スタッフの子どもへの関わりが不適切であった



A25：自由時間の過ごし方が分からなかった



A2：何をしていいか分からなかった

(3) ストレス反応について（質問 B）

ストレス反応尺度については、各項目の平均値は $1 \leq 1.10 \sim 2.18 \leq 4$ と全体として相当に低いレベルであることが分かった。いずれも低い値であるが、上位 6 項目を表 7 に示す。「困ってしまった考えた」「申し訳ない気持ちになった」は、いずれも子どもとの関係の中で、どのように振る舞ってよいのか、対応に苦慮した場合に感じられる反応と考えられる。「眠気」「身体が重たくなる」は身体的なストレス反応であり、「落ち込み」「自信喪失」は心理的なストレス反応である。身体的なストレス反応には十分な休息が必要であり、心理的ストレス反応には心理的なサポートが必要といえる。

表 7 ストレス反応（上位 6 項目）

質問項目	平均値
2 困ってしまった考えた	2.18
3 申し訳ない気持ちになった	2.06
12 頭がぼーっとして眠気を感じた	1.97
1 落ち込んだ	1.74
5 自信がなくなった	1.73
6 身体が重くなった	1.71

(4) 支援スタッフを経験したことによる成果（質問 C）

支援スタッフの経験が、彼らにどのような成果としてとらえられているのかについて質問した。質問 C の項目は $1 \leq 2.95 \sim 3.65 \leq 4$ といずれも高い値を示しており、全体として大学生年代の支援スタッフにとっては個人的に有意義な体験となっていることが示された。

表 8 は、項目ごとの平均値を高い順に上位 10 項目を挙げたものである。支援スタッフの体験の成果とは、「子どもから教わったことがあった」「新しい友人や知人を得た」「施設職員や指導スタッフから学んだ」「仲間と一緒にものごとを達成した」といった内容であることが分かった。もっとも高かった「子どもから教わったことがあった」は子どもに直接関わる支援スタッフの体験を通して得られる重要な成果であると考えられる。交友関係の広がりや仲間との一体感、他者とのつきあい方などは、支援スタッフがお互いにチームとして機能しているからこそ得られる実感であるといえよう。また、第 2 位に「施設職員や指導スタッフから学ぶことがあった」は、支援スタッフが指導ス

スタッフをいかによく見ているか、モデルとして取り入れているかを示していると考えられる。

表8 支援スタッフを体験したことによる成果（上位10項目）

質問項目	平均値
21 子どもから教わったことがあった	3.65
17 新しい友人や知人を得ることができた	3.63
20 施設職員や指導スタッフから学ぶことがあった	3.63
23 仲間と一緒にものごとを達成する喜びを感じた	3.60
18 他の人とうまくやっていく力がついた	3.53
15一人ではなく仲間と一緒にだと思えた	3.52
1 子どもが好きになった	3.50
10 今ここでできることをしていけばよいと思うようになった	3.48
22 人として成長することができた	3.47
8 ものの見方や考え方方が広がった	3.44

（5）自由記述

終了後の気持ちや感想には、支援スタッフを経験したことでの喜びや、苦労を乗り越えた感動、子どもとの出会いのすばらしさ、ふれあいから学んだこと、楽しかった経験などが多く語られている。初参加の支援スタッフは不安感を抱えて参加していること、ベテランの支援スタッフや指導スタッフのサポートを受けて場になじんでいった様子が語られている。一方要望としては、ミーティングに関するものとして、設定時間帯の不適切さ、話し合いが十分でなかったこと等が挙げられている。また他の子どもとふれあえる工夫を要望する声も複数挙がっている。個々のプログラムについても、支援スタッフの立場から改善の要望が出ていることもあり、今後のプログラム作成や事業全体のあり方の参考になるであろう。

4 本調査の成果と課題

（1）成果

今回の調査によって、支援スタッフがどのような思いで夢さがしの旅に参加し、プログラムの中においてどのような思いをもっているのか、心理的身体的ストレスはどのようなものか、また本事業が本人にとってもたらす成果とはいかなるものかについて、ある程度数量的に把握できたと考える。

ストレス項目については、「何をしてよいのか」「子どもとどう関わってよいのか」というまさに支援スタッフの活動の根幹に関わることについて多く体験されていた。また子どもとのネガティブな関係性である、反発や攻撃的な態度、意見が異なる等について経験頻度が高いことが明らかになった。さらには支援スタッフ同士の関係性についても、ストレスとして感知されている様子が推測された。一方で、経験頻度の高いストレス項目において必ずしも高いストレスを感じている訳ではないことも判明した。むしろ、経験頻度はそれほど高くはないが、スタッフミーティングに対する不満や子どもとの相性に困難があったという場合において、そのことをストレスに感じている程度が高

いという結果がでている。これはスタッフミーティングのあり方や子どもの対応に真摯に取り組み真剣に捉えているからこそ、これらの課題が大きなストレスになっていることを示唆するものである。今後のスタッフミーティングや担当する子どもとのマッチングのあり方に一考と改善が求められる。

支援スタッフの感じる心身のストレス反応については、予想よりも低い結果となった。意識的にストレス認知を回避している可能性がなくはないが、全体的にはそれほど心配することはないと思われる。しかし、一部の人にはストレス反応が高く出ており、指導スタッフ側のきめ細かい観察や声かけ、サポートが重要であると考えられる。

支援スタッフを経験したことによる成果は、全体としてかなり高いことが明らかになった。人とのつながりや子どもから多くを教わったこと、チームワーク力やものごとを広く考える力等がついたと評価されている。このことからも、支援スタッフの体験は身体的・心理的な負担は大きいが、それよりも自己の成長につながる体験となっていることが示された。これらの結果は水野・加藤（2007）や黒沢ら（2008）の先行研究を支持するものであると同時に、これまで本事業に関わってきた筆者らの実感を裏付ける結果となった。

（2）課題

今回は分析しなかったが、初心者と経験者において、支援スタッフの体験様式およびストレスの程度が異なることも考えられる。別の機会に分析を試みたい。また今年度においては、初心者と3回以上の経験者がほぼ同数であった。継続して参加している固定メンバーが中心的に活動していることを示唆すると同時に、初参加の支援スタッフがその後どの程度固定メンバーに加わっていくのかについては、今後の動向に注目したい。また、今回は県立のX施設、Y施設を中心に調査を行ったが、自治体ごとに行われている回にも調査範囲を拡大することが期待される。

付記

本稿は、平成22年度生きる力応援プラン「夢さがしの旅」推進事業の調査研究部会の研究成果としてまとめたものをベースとしており、その一部は日本心理臨床学会第30回秋季大会（2011、九州大学）において発表した。

2010年度神戸学院大学人文学部研究推進費（研究代表者：難波愛、研究課題「不登校の親子を対象とした、継続的宿泊体験プログラムについての研究—縦断的検討および、支援スタッフの体験に焦点をあてて—」）、および2011年度神戸学院大学人文学部研究推進費（研究代表者：難波 愛、研究課題「不登校の親子を対象とした、継続的宿泊体験プログラムについての研究（2）—縦断的検討および、支援スタッフの体験に焦点をあてて—」）による研究成果の一部である。

引用文献

- 水野邦夫・加藤登志郎（2007）：ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか？—ボランティア活動経験とパーソナリティ特性、社会的スキル、充実感、ボランティア活動観の関連性からみた一考察—

聖泉論叢、15、141-156.

黒沢幸子他 (2008) : 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長 目白大学、心理学研究、11-23.

岩佐俊輔・山本眞利子 (2008) : ロールプレイを用いた構成的 EG が対人援助ボランティア学生のストレス軽減に及ぼす影響 久留米大学心理学研究7、87-94.